

新島襄における回心の問題

The Problem of the Conversion in Joseph H. Neesima

北野裕通

一 回心の時期について

新島襄（一八四三—一八九〇年）は、九年を越える米國滞在を終えて帰國の途につく一八七四年、アメリカン・ボードの主事宛に送った手紙の中で、自らの回心の時期について次のように語っている。「私の回心は米國到着後しばらくして起こりました。しかし私は神の言葉をはじめ読んで読んだ時以来、神とその光を探し求めてきたのであります。（I date my conversion some time after my arrival in this country, but I was seeking God and his light from the hour I read his word.）」

一八六四（元治元）年、松山藩藩主所有の帆船快風丸に乗って江戸から函館まで来た新島は、それからわずか二カ月もたたないうちに、アメリカの船ベルリン号でそこから脱國を敢行した。途

中、上海で同じくアメリカ船ワイルド・ロウヴァー号に乗り換え、無事ボストンに到着したのは一八六五年七月下旬のことであった。それは一年と一カ月を越す、長い危険な旅であった。幸い、この年の十月、新島がその後、アメリカの両親として慕うことになる、ワイルド・ロウヴァー号の船主アルフュース・ハーディー（Alpheus Hardy）とその夫人が彼を保護してくれることになり、この夫婦の世話でマサチューセッツ州アンドーヴァ（Andover）にあるフィリップス・アカデミー（Phillips Academy）に入學している。そして翌六六年十二月三十一日、新島はアンドーヴァ神学校付属の教会で受洗した。新島、満二十三歳のときのことである。新島が自らの回心の時期を「米國到着後しばらくして」と語っているのは、この受洗のころだと思われる。

ところで、新島の回心の時期について、イーフレイム・フリン

ト (Ephraim Flint, Jr.) は別の考え方を示している。フリントとは、新島がフィリップス・アカデミー在学中に暮らしていた下宿の同宿人である。彼は大学を出て一度教職にあったが、途中でこれを放棄し、牧師になる志を立てて、後に新島もそこに入學する(一八七〇年) ことになるアンドーヴァ神学校に学んでいた。³⁾ 当時すでに四十歳になろうとしていたフリントは、若い外国人である新島に深い関心を寄せ、夫婦で聖書、英語、数学の勉強を助けた。

一八六七年、新島はフィリップス・アカデミーの英語科を卒業して、秋からアーモストに移り、シーリー教授(Prof. J. H. Seelye) について学ぼうとしていたのであるが、このときフリントはシーリー教授宛に新島に関する紹介状を書いている。その一節で、フリントは新島の品行と人柄を称賛した後で、次のように述べている。「彼の信仰上の進歩も注目すべきものがありました。彼は、アンドーヴァに来る前に回心していたのだと思います。真理が彼の心に届くや否や、彼はそれを欣然として受け入れたようです。

(His religious progress has been remarkable. I think he was converted before he reached Andover. As soon as truth reached his mind, he seemed to be all ready to embrace it.)」(傍点引用者、以下同) すなわち、フリントは新島の回心の時期を「アンドーヴァに来る前」、従って一八六五年十月以前と推定している。この推定があながち無視し得ないのは、第一に、それが常に新島の身近かにいた、それ故に新島の人格について、詳しく観察し得る位置に

いた人物の見解であるという点、第二には、その同じ人物が上述のごとき神学生であったことから、彼に宗教的なものを見分ける確かな眼の具わっていたことが期待できるという点、からである。それで、もし我々がフリントの推定を信頼してよいとするならば、どういうことになるだろうか。この場合でも、新島の回心の時期について彼自身の語っていることと、フリントの述べていることとは必ずしも矛盾しているとは言えない。ただし、その場合には、フリントの推定を「アンドーヴァに来る前」そして、ポストン到着以後と限定して考えるのであればならない。なぜなら、新島は彼の回心の時期を「米国到着後」としているからである。しかし我々には、その間において新島が回心の出来事らしきことを語っている記事を見いだすことはできない。それではフリントのいう「アンドーヴァに来る前」とは、いつごろのことと考え得るであろうか。

新島が同志社を創設するにあたって、その片腕となって働いた J・D・デイヴィス (Jerome D. Davis) は、新島から直接聞いたこととして、次のような話を伝えている。

『ファイルド・ロウヴァー』に乗っていた一年間のうち、彼は漢訳の新約聖書を読み始めたのであった。彼は一字一字を辿りながら意味をのみこむことができた。マタイ伝から始めて、マタイ、マルコ、ルカと読み進んでいった。船旅のさい中に彼はヨハネ伝の三章十六節まできた。それは『神はそのひとり子

を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」という聖句であって、この個所は彼に非常に深い印象を与えた。これこそがまさに自分の欲していた救い主である、と彼は感じたのであった。⁽⁶⁾

事実、新島は香港で漢訳の新約聖書を手に入れている。彼によれば、「ボンコンで私は中国語訳の新約聖書を買いたいと思ったが、日本のおかねは通用しないことがわかった。そこで私は船長に頼んで私の小刀を八ドルで買ってもらった。そのかねを入手してしばらく後（中略）私は中国人の書店で新約聖書を買う好機にめぐまれたのであった。」⁽⁷⁾新島が航海中につけていた日記を見ると、一八六四年十一月八日「今日、予⁽⁸⁾レ余の小刀を八元二而甲比丹に売却す」、十一日「予上陸⁽⁸⁾」とあるから、新島はこのときに漢訳聖書を手に入れたに違いない。それはともかくとして、孤独で危険な冒険の途上にあつた新島にとって、ヨハネ伝三章十六節が大きな励みになつたであろうことは想像に難くない。デイヴィスによつて伝えられている、我々にとつても印象深いこの出来事を、新島における回心の出来事と考えることは全く不可能というわけではないが、航海中、実は漢訳聖書を手する以前にも、新島が英訳聖書に親しもうとしていた事実が、我々がそのように考えることを躊躇させる。なぜなら、新島の生きていた時代、そもそも聖書に関心をもつということ自体、特別の意味をもつと考

えられるからである。日記には、一八六四年六月二十五日「今日セーロルより借りたる耶蘇經典を読む事少許なり⁽⁹⁾」とあり、また八月九日「甲比丹、予ニバイブルを与へり⁽¹⁰⁾」と記されているのである。デイヴィス自身も新島の回心の時期を、そのときよりも前、しかもずっと以前に想定していたように思われる。デイヴィスは次のように述べている。

「ハーディー氏は若い新島をアンドーヴァーのフィリップス高等学校へ入れた。新島はこの機会を最善の仕方で活用した。しかも彼ははじめで自分の罪を完全に理解し、人々の前でキリストを救い主として受け容れ、キリストの教会に入会したのであった。しかしながら彼がこれよりも以前に神に受け容れられていたということ、そしてたとい真理探求のための長い航海の途中に死ぬようなことがあつたにしても、彼が救い主の前に喜んで頭をたれ、礼拝する用意のあつたということを誰が疑い得ようか⁽¹¹⁾。」

これによれば、デイヴィスもフロントと同様、新島が受洗以前に回心を経験していたという立場をとっているように考えられる。その上、デイヴィスの場合には、そこに述べられている「たとい真理探求のための長い航海の途中に死ぬようなことがあつたにしても」という文意からも、「受洗以前」を新島の脱国時以前と解するのが適當のように思われる。

新島は脱国前、「ロシアの司祭宅におよそひと月間滞在⁽¹²⁾」して

いる。「ロシアの司祭」とは、函館のロシア領事館付司祭ニコライ (Nicolai Kasatkin) のことである。新島がニコライに接触するようになった経緯は、日記によれば次のごとくである。函館に到着した新島は最初、予定どおり蘭学者武田斐三郎を塾長とする武田塾に赴いたが、「当時塾生四五二して格別に読む人はなかりし由、且武田氏は江戸へ参りし由、其上僅かの諸生二而、めしたき男をかゝへしは無益にして、入費もかゝりし故、銘々其屋敷或ハ其宿許へ行き飯喰ひ候由二而、甚不都合なり、故ニ西洋人の家に至らん事を企てり」(一八六四年四月二十六日¹⁴)。そこで武田塾の留守居の長岡藩士菅沼精一郎に相談すると、彼に「予魯国の僧官ニコライなる者を知れり、此人英敏ニして博学なり、其故か魯帝の命を受け茲に来り日本語を学へり。此人近来日本学の師を失ひし故頻に其師を求めり、汝なんそ魯僧の家ニ至らざる哉、且此人英語ニも通セし故、汝の英学を学ぶに少しハ助けとならん」といわれたので、「予意を決し其家に至らん事を頼めり」(同月二十八日)とある。そこで新島は、函館に在る間ずっとニコライ宅に止宿している。ここで予想されるのは、このとき新島はニコライを通して、キリスト教的感化を受けることがなかったかということである。なぜなら、ニコライがロシア正教会の司祭である以上、そういうことは当然期待されてよいことだからである。だが、

その形跡はまったく見当たらないのみならず、ニコライが新島に「英語のみならず聖書を喜んで教えよう、と言った」¹⁶にもかかわ

らず、新島はその申し出も受け入れなかったというのが事実である。その理由は、そのときすでに新島は脱国を計画していたからである¹⁷。このようなわけで、新島の函館滞在中にも、彼に回心が生起したと呼ぶべき出来事を見いだすことはできない。そこで我々は結局、新島がまだ江戸にいたころ経験した、次に述べる「天父の発見」時まで溯らざるを得ないことになる。

一八六三(文久三年)、快風丸での二カ月に及ぶ浦賀―備中玉島往復の航海から帰った新島は、それから間もなくして、ある友人からたたくさんの漢書を借りている。その中で新島が好奇心をもつともそられたのは、数冊のキリスト教に関する書物だった。新島は書いている。

「私はそれらを熟読した。いくらか懷疑を覚えたけれど、またいくらかは畏怖の念にうたれた。以前に勉強したオランダ語の書物を通して、創造者という言葉は知っていたが、中国語で書かれたこの短い聖書の歴史の中で、神の宇宙創造に関する純な物語を読んだ時ほど、創造者という言葉が胸にひびいたことはなかった。私たちが生きているこの世界は、神の見えない御手によって創造されたのであって、単なる偶然的産物ではないことを私は知った。同じ書物から私は神の別の名前が『天父』(Heavenly Father)であることを知り、そのことは私の内部に神に対するさらに大きな尊崇の念をかきたてた。なぜなら私にとって神は単なる世界の創り主以上のものだったからである。

これらの書物は、この世に生まれてから二十年間にわたって目隠しされたままだった私の心の目に、おぼろげながらも、一つの存在を見ることを得させてくれたのである。⁽¹⁸⁾

我々は残されている新島の手記類の中から、彼の宗教的経験に関して、これ以上に劇的な出来事を見つけ出すことはむずかしい。キリスト教の書物とのこの出会いは、マッキーン (Phebe F. McKen) も述べているように、確かに新島にとって「革命」(Revolution)を意味した。⁽¹⁹⁾このときから彼の関心は、急速にキリスト教へと傾斜してゆくからである。新島が函館で英学の師を求めたのは、英語で聖書やその他の新知識を読めるようになるためであったと考えられるし、最後に脱国を敢行したのも「福音が自由のべ伝えられている土地」を訪ねてみたいと思ったからである。⁽²⁰⁾それゆえ我々は、新島におけるこの経験を単なる改心ではなく、宗教的したがって全人格的転換を意味する回心 (conversion) と考えてもよいのではないだろうか。すでに述べたように、フリントもデイヴィスも新島の回心の時期を彼の受洗前と考えていた。我々は以上の考察によって、それを上述された「天父の発見」時と推定したい。マッキーンは明らかに我々の同調者と見なすことができるであろう。(因みに、小論冒頭の引用中、新島が「神の言葉を始めて読んだ時」と述べているのは、一八六三年のこのときのことであると思われる。)

さて、そこで問題は新島の回心の時期をめぐって、いま二説が

存することである。一つは、「米国到着後しばらくして」、すなわち一八六六年の受洗したところというものである。これは新島自身が語っていたことである。これとは別に、それを一八六三年における「天父の発見」のときとする見解が成立し得る。フリント、デイヴィス、マッキーンはこれを支持するものに数えることができる。我々はアメリカン・ボード宛の公式の書状で、新島本人が述べているそのことを疑うことはできない。だが他方、フリント等が述べていることから推定される一八六三年説にも、棄てがたい確かなものが感じられる。そこで我々は、この問題を次のように考えたい。すなわち、一八六三年の出来事を新島における第一次の(あるいは最初の)回心、一八六六年のそれを第二次の(あるいは決定的)回心と、新島に少なくとも二度の回心体験を想定するのである。こうした見方は決して特殊ではない。むしろ、一回限りの回心の方が事例としては少ないであろう。明治期の代表的キリスト者としてよく知られている内村鑑三の場合にも、数次の回心体験が考察され得る。新島についてもそうであるように、確かに最初の回心は、まだ信仰についてのある種の不確かさを残している点で、決定的回心ではない。しかし、そこから信仰の深化への確かな第一歩が踏み出されている以上、やはりそれも回心と見ることができようであろう。果たして、新島においてそういうことがいえるかどうか、次にさらに詳しく検討してみたい。

二 最初の回心について

我々が一八六三年の新島における「天父の発見」を「最初の回心」と呼ぼうとする主たる理由は、そのとき以来、彼に自己否定的行為の目立つことである。我々における自己の否定は、いずれの宗教であるにせよ、宗教に入るための必須の要件である。これなしには宗教は成立しないといえる。新島の場合、その自己否定は彼の行なった次のような行為のうちに示されている。第一に、先述のごとく新島は脱国を企図したが、これの遂行は二重にも三重にも死の危険をはらんでいた。その一つは、万一その計画が事前に発覚すれば、国禁を犯した罪であるいは処刑される可能性があったであろう、その二は、たとえうまく脱国できたとしても、当時の船旅は現在ほどの安全性はないから、やはり死の覚悟を要したのであるう、その三は、たとえ無事に彼地に至り得ても、身を寄せる確かな場所が決まっていたわけでもなかったから、生きて帰れる保証は何もなかったであろう。つまり新島は、彼が脱国を計画した時点で、自己の命を棄てたといえる。そして「ひたすら運を神の御手にゆだねた」⁽²¹⁾のである。第二に、彼は自己の身分を棄てたといえる。新島は安中藩に仕える武士の子として生まれ、自分も立派な武士になるよう志したこともあった。⁽²²⁾しかし、いまや彼はそれをも断念したかに思える。脱国の計画をニコライに打ち明けて反対された新島は、イギリス人の開いていた商会の店員

富士屋宇之吉（後、福土成豊）と知り合い、彼の助力でいよいよベルリン号への乗船が決まるのであるが、このときから新島は服装と頭髪を質素なものとし、武士のしるしである長刀を廃して衆目をさけている。⁽²³⁾しかし、こうした行動は単に一時的なものではなかった。ベルリン号が函館港を出帆してから十日ほどたった六月二十四日の日記を見ると「昨夜髪を斬る事五寸強」とあり、同じく三十日には「今日、予髪を斬れり。些少之髪を畜へ他を抛」と記されている。新島が漢訳聖書入手するために、船長に自分の小刀を売却したことは前に述べた。それ以前、すなわち七月十三日の日記には「昨日、予か長刀を船主二贈れり」と書き込まれている。このように、新島はベルリン号の乗船後一カ月もたないうちに、武士であることを表わす丁髷と刀を廃してしまっているのである。あるいは、こうしたことは形式的もしくは外観上のことにすぎないといわれるかもしれない。そこで、新島の語っている、船中でのある出来事を紹介しておかねばならない。船中に一人の乗客がいて、新島に英語を教えていた。あるとき、いわれていることがよく分からず、新島はその外国人から殴られたことがあった。屈辱を感じた新島はすぐに刀をとり、自室にもどりの外国人を斬り捨てようとしたが、前途に待ちかまえているかもしれない、一層大きな試練のことを思っ自重し、「今後はどのようなことがあっても刀に手をかけまいと決意した。」⁽²⁷⁾ここではもはや、武士的自己の傲慢さは影をひそめている。新島は武士で

あったから、以前には当然そうした自己をもちあわせていたであろう。しかし、いまはそういう自己が否定されている。つまりこのとき、新島は外面上のみならず内面的にも、従来の自己が否定された地点に立っているのである（この事件の起こったのは、恐らく長刀がまだ手元にあったころのことであろうから、新島が函館を出て間もなくのことと思われる）。新島における自己否定は第三に、すべての人間的絆を一旦切るといふ形で現われている。

新島は次のように述べている。「神をわが天の御父と認めた以上、私はもはや自分の父母にわかちがたく結ばれているとは感じなかった。（中略）私は地上の両親よりも一層天の御父に仕えなくてはならぬ。この新しい考えが私を力づけ、私は断然藩主を見棄て、また一時的に家をも祖国をも離れる決意をした。」我々における自己の否定のうち最も困難なものは、家族の一員としての自己を否定するということだと思われる。肉体的自己、階級的自己は棄て得ても、家族的自己を廃棄することは自己否定的努力の最後の関門である。まして新島の時代は、まだ儒教的な忠孝の精神が最高の価値を有していたからなおさらである。しかし驚嘆すべきことに、新島はその関門を余り躊躇することなく潜りぬけている。このことは新島が、いわゆる知性の段階を越えた深所において「天父」を受け容れることができたためであろう。換言すれば、新島の心はそれほど純一であったということであろう。このように両親との絆を一旦断念することのできた新島にとって、藩主や祖国

を離れることは、それと比較するとき、いっそう容易なことであったろうと想像される。しかし、いま述べた新島のこうした行動は必ずしも不義理を意味しない。洋上において、また米国に上陸して後、新島が両親、他の家族、江戸や函館で世話になった人々のことをいかに大切に思っていたかは、ここでそのいちいちについて指摘するわけにゆかないが、現在残されている彼の日記や書簡が雄弁にそれを語っている。

以上、新島が「天父」を見いだして以来、いかに自己否定を遂行したかを述べてみた。これによって、新島における自己否定の徹底性が十分に理解できるであろう。それゆえ、そこには明らかに価値ならびに自己存在の意識に関して宗教的ない大転換があったと見なければならぬ。我々が一八六三年のあの出来事を回心と考える所以である。ところで、新島におけるこの最初の回心には不思議に思えるところがある。というのは、新島の手記によれば、前述のごとく、それは彼が友人から漢訳聖書の抜粋らしきものを借りて読んだときに、何の前触れもなく起こったように見えるからである。「かつて一人としてキリスト教信者に会うこともなく、だれか他の人から一語も説明を受けることなく、完全な聖書も所有していなかった」³⁰にもかかわらず、そうした出来事が生じたことに、我々は驚きを禁じえない。まさにそれは新島にとって、神の恵みといってもよかったであろう。回心に漸進性のもとの突発性のもとを区別するとすれば、その限り新島の最初の

回心は突発性のものであったといひ得る。しかし、突発的回心といえども、単にそれを神秘ということに済ませるわけにはゆかないであろう。そこにも、説明されるべき相当の理由があると見なければならぬ。突発的に見える回心も、そこに至るための長い準備期間があったはずだと考えられる限り、漸進的性格を有している。それゆえ、新島における最初の回心を、その点より少し考察しておきたい。

宗教的自覚に至る過程について考察しようとする場合、そのひとの幼少ころの経験が看過し得ない重要な意味をもっていることは、誰も否定しないであろう。新島もその手記の中で、幼少時に見た家族の神仏に対する信心深さ、この家族の感化によって自分もまた、神仏に対して敬虔な態度を保持していたことを語っている⁽³¹⁾。しかし、この点についてはすでに多くの論者も触れていることでもあるので、ここではとくに新島の青年期について考えてみることにする。一八五八（安政五）年七月、十五歳のとき新島は、彼を寵愛してくれていた安中藩の家老尾崎直紀に次のような手紙を書き送っている。「敬幹慎呈書、此比聞四方風談、恐天下有大乱、此比夷夷数来請交易、天下評議紛々更不決、（中略）若及乱敬幹不能学書、今不学恐失時、宜使敬幹入塾開矇目、是僕之以赤心所願也⁽³²⁾」。敬幹とは新島の名である（幼少名は七五三太⁽³³⁾）。この文面の趣旨は要するに、近来、外国船が来たって世情が非常に不安定である。もし内乱でも起これば学問ができなくなるので、いまの

うちに入塾できるよう父に勧めしてほしいと頼んでいるのである。新島の青年期は、いわゆる黒船が方々から交易を求めて近海にせまり、その是非をめぐって日本国中が震撼していた時代である⁽³⁴⁾。新島が尾崎宛の書簡で、学問がしたい旨を訴えているのは、学問のために学問するためではなく、それは将来の日本を見すえた上でのことであつたであろう。十五歳の青年にしてそれだけのことを判断し得たところに、新島の眼識の鋭さと確かさを我々はうかがい知ることが出来る。一八六〇（万延元）年、新島はたまたま江戸湾べりの海岸を歩いていて、そこに停泊していたオランダの軍艦をみつけたときのことをこう語っている。「これら威厳のある海の女王たちを、不細工で不釣り合な日本の小舟とくらべてみたとき、このような軍艦を建造した外国人たちは日本人よりも知識においてはるかにすぐれた、優秀な人々であるに違いないことをいやというほど確信したのだった。これはわが国をよくし、改革、していかなくではならぬという叫びへと私の野心を燃えあがらせるための強力な実物教育のように思われた⁽³⁵⁾」。これを機会に新島は航海術の勉強を始めるのであるが、ここに彼の学問的情熱が憂国、したがってまた愛国の心に発していたことがよく示されている。ところが彼の学問したいという気持は、十分に満たされることはなかった。というのは、十五歳になって彼は出仕しなければならなくなったからである（また父の留守中は、父の祐筆職の代勤、家塾の弟子の教授もしなければならなかった）。彼はそれで

も何とか勉強のための自由な時間を見つけようとしたが、当時の封建的な幕藩体制の中に身動きできない仕方でも組み込まれていた彼に、それはとても出来ることではなかった。新島の体制批判はすでに十四、五歳のときに始まるが、そのようにして彼の体制批判は次第に強化されていったと見ることが出来る。一八六三年、新島が「天父」に出会うその直前には、そうした彼の不満は頂点に達していた。彼は書いている。「当時、国内には戦雲が急を告げていた。藩主は力を得つつあった尊皇派に対抗し、不幸な將軍の側に加担して立ち上がることを余儀なくされた。私としては尊皇派の方に十分な共鳴を感じていて、それに参加したいと思ったことが時々あった。しかし両親と祖父に私を結びつけていた親愛の絆は私を同時にまた彼らの主君にも結びつけていた。これは私にとって今一つのきびしい試練であった。私は極度に神経がとがり、苛立ちを覚えるようになった。」⁽³⁷⁾これを讀むと、新島の中に新しい価値意識が台頭してきていて、いまにもこれが旧来の古い価値意識にとってかわろうとしているが、それが後者によって辛じて抑圧されている様子がよく分かる。すなわち、新島はいま一触即発の状態におかれている。

手記を見る限り、新島の体制批判は政治的方面に強く現われていると思われる。しかし、体制とは本来、政治・経済・文化等の各方面が有機的に連関した全体である。それゆえ、新島の体制批判は当時の宗教・道徳的方面にも及んでいたはずである。後年、

新島は「私は仏教の信仰の中で育てられ、儒教の徳育をも受けました。その後私には仏教は不愉快な (offensive) もの、儒教は不満足な (unsatisfactory) なものとなりました。このような影響のもとで私はいくらか懷疑的となりました」と述べている。仏教が「不愉快」であったということが、具体的にどういうことであつたのか、はっきりとは分らない。しかし、マッキーンによれば、新島の宗教 (神仏) 批判は彼の十五、六歳のときに始まっている。⁽³⁹⁾ 儒教的な徳育に関しては、彼は少年時代に両親の勧めで、一年間以上も礼儀作法の修得のため私塾に通わされたことを記している。⁽⁴⁰⁾ 新島はこういう訓練を通して、幼少時から儒教的な道徳的精神を人一倍吸収していたであろう。しかし、忠孝を機軸とする儒教的道徳の精神が、国家動乱の危機に際して彼から学問の自由を奪っていることを知ったとき、まずそういう点で新島は儒教に対して不満をいだいたに違いないと考えられる。⁽⁴¹⁾ そして、こうした不満が感じられたのも、彼が学問することを一層切望するようになる十五、六歳からのことだと思われる。要するに、こうして新島の体制批判はそのころから全面的に開始されたと考えられるのである。

このことを宗教心理学的に解すれば、新島はそのときに、いわゆる「青年期の危機」を迎えたということである。一般に宗教面から見られた青年期の特徴は、懷疑 (これは批判とともに始まる) という形をとり、それは十六歳前後に経験されるといわれるが、新

島の青年期はまさにその特徴を具えていたと見ることができるところで、批判もしくは懷疑が芽生えるということは、即自的自己在対自的になるということであって、それは自己分裂の危機に遭遇するということである。新島の場合、これを体制的自己と(体制)批判的自己の対立といってみることができよう。そこでは当然、アイデンティティーは喪失されていく。「天父」を発見する以前の新島は、内面的には新たなアイデンティティーの確立を求めて、あるときには体制的自己と批判的自己との激しい葛藤の内にあつたと推測される。このように推測し得る理由として、我々は青年新島の病気に関する記録に注目したい。(彼は出仕と勉強との過労で、眼を痛めた外しばしば病気にかかっている)。「天父」発見直前の新島がその精神的葛藤によって、自己が破壊されるほどに極度に神経をすり減らしていたことは前に見たが、新島は以前にもこれに似た病状を経験している。十八歳ころのことかと思われるが、出仕の仕事がふえて勉強どころではなくなったときのことである。このことで彼は「はげしく思い煩い、とうとう病気になるって」しまった。このとき彼は「誰にも会う気がせず、遊びに出たい気持も起こらず、願うところはただ、静かな部屋にじっとしていることだけ」だった。「悪質な病氣」だと思つたので、医者のところに出かけたところ、医者は何度か彼を診察した後にごういったといわれている。「あなたの病氣は心から来たものです。だから熱した心をまず打ちくだくようにしなさい」と。これ

は現在の鬱病に相当するだろう。その病が、学問を志す(体制)批判的自己の体制的自己による抑圧と、これに伴う両者の葛藤に端を発していることは明らかである。事実、その後、蘭学の勉強ができるようになったことが、「医者のくれた薬よりもずっとよく私の病氣にきいた¹³⁾」と、新島は述べている。すでにいった通り、一八六三年、「天父」に出会う直前の新島の意識は、それまで練り返されていたと考えられる二つの自己の間の対立葛藤が極点に達し、一触即発の状態に置かれていたと思われる。

我々は新島における、いわゆる「天父の発見」を、上述した二つの自己の間の、長きにわたる対立の止揚と見ることができであろう。すなわち、体制的自己と批判的自己との対立が、キリスト教の神との出会いを通して覚醒された新たな宗教的自己によって和せられたのである。ここに我々は、一八六三年の、新島におけるあの出来事を回心と呼びうるもう一つ別の理由を持つ。なぜなら、回心とは、それまで分裂していた自己が、宗教的実在の把握によって再統一される過程に外ならないからである。¹⁴⁾しかし、新島の場合、それはどのようにしてであつたと考え得るであろうか。このことで我々の注意を引くのは、新島の聖書の理解の仕方である。既述のごとく、新島は漢訳聖書の抜粋らしきものを読んだときのことを、まず「神の宇宙創造に関する単純な物語を読んだ時ほど、創造者という言葉が胸にひびいたことはなかった (never came home so dear to my heart)」と述べ、次に「神の別の

名前が『天父』であることを知り、そのことは私の内部に神に対するさらに大きな尊崇の念をかきたてた (created in me more reverence towards Him)」と語っているが、我々に少し奇異な印象を与えるのは、新島の叙述がそこからすぐに、「神をわが天の御父と認めた以上、私はもはや自分の父母にわがちがたく結ばれているとは感じなかった」というふう⁽⁴⁶⁾に展開していく点である。

このことは、新島において「天父」との出会いが、將軍——藩主——両親という旧秩序に代って、神を頂点とする新しいヒエラルキ⁽⁴⁷⁾が直覚されたということを意味したであろう。(この直覚には、幼少時に家庭の中で陶冶された彼の宗教的情操が与っていたであろう。) 創造者という言葉がことの外、新島の「胸にひびいた」のはそのためでなかったか。そしてその直覚が確信されたがゆえに、彼は「もはや自分の父母にわがちがたく結ばれているとは感じ」なくなつたのであろう。しかし、そうした新秩序の確信は従来の親子関係からの自由、したがってその解体のみを意味しない。それは新たな価値を伴って、盤石のごとく見えた旧秩序の一切に及ぶことになる。かくして彼は、「断然藩主を見棄て、また一時的に家をも祖国をも離れる決意」もできたのである。神を主とする新秩序の発見は同時に、体制的自己と批判的自己の闘いがそこにおいてやみ、新島が新たに誕生した宗教的自己に落ち着いたということである。あるいは、その自己の座が宗教的な新秩序に定位したということである。価値と存在との意識革命として、

新島における最初の回心は以上のようにして遂行された。日本国の新たな誕生(明治への改元)に先駆すること五年前の出来事であった。

三 最初の回心の特色

おわりに当たって、新島襄における最初の回心の特色を簡単に見ておきたい。すでに小論において示唆されたように、その特色は最初の回心が、国家的動向との深い連関のもとで遂行された点に存すると考えることができる。新島の青年期はいわゆる黒船の来航(因みに、ペリー提督の来日は一八五三年、新島十歳のときのことであった)によって、開国か鎖国をめぐる日本国中に議論が沸騰した、激動の時代であったことはすでに述べた。この意味で幕末から明治初めのころにかけて、日本は国家存亡の危機に直面していたといひ得るであろう。この点で、我々はこの時期を鎌倉時代と比較することができるかもしれない。周知のように、鎌倉時代に日本は元寇によって国家的危機を経験した。他面、この時代には親鸞、道元、日蓮らがでて、中国伝来の仏教を変革して日本的な新しい仏教を興している。外国諸勢力による国家的危機の意識と宗教的自覚との間の因果関係については、詳しい検討が必要であろうが、確かにそこには何らかの関係があると考えられる。このことは幕末・明治初めの時期について、少なくとも新島の場合には、はっきりとそう主張することができる。この外、

激動する明治期の代表的キリスト者と考えられる内村鑑三や植村正久らについても、西洋伝来の宗教を受容しつつ、常に国家との関係が視界に収められていた点は注目に値する。新島においては、国内における体制と反体制、旧価値と新価値をめぐる抗争をやや先取りする形で、それがそのまま彼の内面の葛藤を形成していたように思われる。つまり彼においては、国家的苦悩と別に個人的苦悩があったのではなく、両者は一つであった。それゆえ、回心後の救済も新島の場合、個人的レベルで終始しおわるのではなく、必然的にこれを越えて国家的救済にまで押し上げられねばならない性格を最初から有していた。函館まで来て、それまで以上に世間を注意深く観察できるようになった新島は、次のように考えるに至っている。「いちばん驚いたことは、人々の腐敗した状況だった。単に物質的に発展するだけで、道徳がそのようなげかわしい状態にある限りすべては無益である、とその時考えた。日本は、単なる物質的な進歩にまさって、道徳上の革新が必要だ。こうして、外国に行こうという私の目的は一層強化されたのである。」⁽⁴⁾ 回心前の新島における内面的葛藤が愛国的なものに根ざしていたと同様、回心後の宗教者としての彼の歩みも愛国的なものであった。これがやがて、キリスト教的教育によって国民を啓発しようとする、同志社創設への運動となって展開されることになる。しかし、そのためには彼はまた、自らの罪とキリストの十字架架における出来事とを自覚すべく、その信仰を深化させる必要があった

た。一八六六年の新島の第二次の回心はそういう意味をもつていた。

(一九九〇・十・三十一稿)

注

(1) 『新島襄全集』(以下、『全集』と記す)第十卷(同朋舎出版、一九八五年)、一八四頁。ここには、アーサー・ハーディー著『新島襄の生涯と手紙』(一八九一年)の邦訳が収められている。

なお、原文からの引用は、

Arthur Sherburne Hardy, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, reprinted by Doshisha University Press, Kyoto, 1980, p. 166.

(2) 受洗以前に何か特別の、回心と呼ぶべき経験が新島にあったかどうかは現時点では分からない。ただ、一八六六年十月二十七日付けのハーディー夫人宛の手紙で、「私はイエスに対して自分自身でしっかり決断しました」(『全集』第十卷、六八頁)と述べているところから、新島において「米国到着後」の回心は、事実上、受洗の時期以前(ただし、それから余り隔たらない以前)になされていたと考えねばならないであろう。

(3) 『全集』第十卷、「注解」三八八頁。

(4) シーリー教授については、『全集』第十卷、「注解」三九一頁を参照されたい。

(5) 『全集』第十卷、七九頁。 *Life and Letters*, p. 69.

なお、『全集』では“was converted”のところが「改心した」となっているが、「回心した」と改めた。『全集』でそのところが「回

心」でなく、わざわざ「改心」となっているのは既述のごとく、新島が自らの「回心」の時期を「米国到着後」と語っている点を尊重したためだと考えられるが、小論は後述するように、新島に第一次の回心、第二次の回心を考える立場から、用語を統一した。

(6) 北垣宗治訳『新島襄の生涯』(小学館、昭和五十二年)三〇頁。

(J. D. Davis, *Joseph Hardy Neesima, New York: Young People's Missionary Movement of the United States and Canada, 1905, pp. 30-31.*)

デイヴィスについて詳しくは、同書の「訳者あとがき」を参照されたい。

(7) 『全集』第十卷、四七頁。

(8) 『全集』第五卷、五四頁。

(9) 同右、四〇頁。

(10) 同右、四六頁。

(11) 北垣訳、前掲書、三五頁。

(12) 『全集』第十卷、四二頁。

(13) 武田塾については、『全集』第十卷、「注解」五一二頁を参照されたい。

(14) 『全集』第五卷、一九頁。

(15) 同右、二〇頁。

ここで注目すべきことは、新島がニコライの寓居に移ることに決した理由の一つに、「英学を学ぶ」の便が考慮されたということである。新島が遠路はるばる江戸から函館にやってきたのは英学を学ぶためである。当時の新島はそう周囲の人々に公言していた。その証左として、菅沼は新島のことをニコライに、「此人我旧友なり、此度江戸より此地へ渡海し英文を学ぶ事を望みし云々」と紹介し、

新島自身も、「彼〔ニコライ〕、予の英学に志し遠路を嫌わず単身此地に来るを喜ひしにや、予を待^ちする事実ニ至れり尽セリと云ふへし」と、日記に書いている(『全集』第五卷、二〇頁)。また、一八六四年五月二十五日、新島が父民治に送った手紙にも次のように述べられている。「五日より魯西亜人ニコライと申す大学者の家へ寄宿り修業仕り候。此人は大分深切に世話いたし呉候。且つ此人は英学も出来、日本語も出来候故大いに都合よろしく候」(『新島襄書簡集』岩波文庫、二八頁。なお『全集』では第三卷、一八頁)。

(16) 『全集』第十卷、四二頁。

(17) この辺の事情については、後に新島は次のように述べている。

「江戸を出たのは一八六四年の早春の頃で、一か月以内に私たちは無事に函館についた。ここで私は外国人への接触を計画した。彼らの好意によって、脱国を目論んでいたのである。一友人を通してロシアの司祭ニコライ神父に紹介され、彼の日本語の教師をとめることになった。彼の影響力を通して私は自分の目的を上げようと思ったのである。(中略)

ロシアの司祭宅におよそひと月間滞在したあとで、私は彼に徐々に私の秘密の目的を打明け、それを実行するための助力を頼んだ。その時私は彼にこう言った。日本がいちばん必要としているのは道徳上の改革です。そして私の確信するところでは、その改革はキリスト教を通してもたらされなくてはなりません。司祭は私と話すことを大いに喜びはしたが、私が打明けたような計画には反対の意味を表明した。彼はなおも私に自分のところにとどまっているようにすすめ、英語のみならず聖書も喜んで教えよう、と言った。彼の警告にがっかりした私は、外国商館に友人を見つけようとし始めた」

『全集』第十卷、四一—二頁。

日記には五月二十四日、「古事記を読む／此日——君へ我心中をあかす／マグネシア十二袋請取ル、日三度ツ、のむなり」（『全集』第五卷、三六頁）とあるから、この日に新島は脱国のことをニコライに打ち明けたのであろう。なお、この記事から、ニコライの日本語教師として、新島は彼と一緒に『古事記』を読んでいたこと（五月八日の日記に「今日よりニコライと共に古事記読始めり」とある——『全集』第五卷、二二頁）が知られる。それから「マグネシア」とは恐らく眼の薬のことであろう。新島には以前より眼に持病があり、函館上陸後もロシア病院で治療を受けている（五月七日の日記に「……魯の病院に参り、魯医ザレスケーなる者に眼の治療を托せり」とある——同上、二二頁）。

以上によって、新島がニコライに脱国のことを打ち明けたのは確かだと考えられるが、そのころ新島がニコライに宛てて書いたと推定されている書簡が残されている。そこでは、眼の治療の件でザレスケーに骨折してもらえよう頼んでほしいと依頼するついでに、次のようなことが述べられている。

「近頃政府の政事益々、国家益みだれ、物価益高登し、万民益困窮いたし候、さて国の有様かくなりしは、全く教のたゞずして、国人神の道を知らざるより然らしむるとそんし候（中略）然れば、……私共は第一に『クライスト』聖教を学び己れをみかき、而して後其教書を積して国中に布告いたし、国人をして尽く歐羅巴の強兵もへぶり難き独一真神の道を知らしめば、政もおのつから立ち、国も自らふるひ候半とそんし候、嗚呼我邦もしかなりませば、私の身は Crucified さるゝ共決してうらみず、全く神への奉公『クライスト』への勤めとそんし候、しかし日本にて、『グ

ライスト』教を学ばんには、極めてかたかるべし、いかんとなれば、『クライスト』教は国禁のみならず、此地にて学ひ候得ば速やかにいまいり難からん、故にひそかに欧羅巴へ抜け行き、是非とも此の志を遂げんとそんし候（中略）私学問の爲めとて欧羅巴へ参り得べき工夫は、いかゞいたして宜しきか臥し而奉伺候」（『全集』第三卷、一六一—七頁。なお、本書簡の考証は、同巻の「注解」七四—一頁になされている）。

これによれば、国家存亡の危機に際し、その基礎を宗教に求めた新島はこれをキリスト教に期待したが、当時キリスト教は禁じられていた上に、国内ではその修得に時間がかかりすぎると判断、そこで「欧羅巴」へ脱国を計画したのである。これによって我々は、何故に新島がニコライの親切な申し出を断ったかが一応理解できるであろう。

ついでながら、新島がいつ脱国を考えるようになったかについては、新島自身の発言に食い違いが見られる。すなわち、一八六五年十月、新島が自分の生立ちや脱国の理由を記してハーディーに渡した英文で、彼は「函館に到着のち適当な英語の教師を探しましたが、八方手をつくしても見つけることができません。そこで私の心は一変して、国外への脱出を考えるに至ったのであります」（『全集』第十卷、一六頁）と述べている。これによれば、新島の脱出計画は函館到着後になされたということになる。ところが、彼はまた一八八五年八月、自分の青春時代を記してハーディー夫妻に贈った手記では、こう述べている。快風丸が三日以内に江戸から函館に向かうことをある友人から聞いたとき、「一つの考えが稲妻のように私にひらめいた。函館に行けるこの機会をのがしてはならぬ、そこから外国への逃亡をはかるのだ、と」（『全集』第十卷、三九頁）。ここで

- は、その計画が、新島がまだ江戸にいるときからすでになされていたことになる。さて、それらのいずれが真であろうか。研究者たちはその多くが、新島の脱国計画が彼の江戸にいる間に目論まれていたと推定している。その根拠として、新島がある送別の席で詠んだ詩に「男児自有蓬桑志／不涉五洲都不休」（『全集』第五卷、四八七頁）の句が見いだされること（鶴見俊輔、和田洋一編『同志社の思想家たち』七頁）、家族らの送別の宴で祖父が水さかずきをまわしたこと（『全集』第十卷、四〇頁）、新島が函館への船上で「武士乃思ひ立田の山紅葉にしきささればなと帰るへき」（『全集』第五卷、一一頁）と歌ったこと（以上、和田洋一『新島襄』七一―三頁）が挙げられている。
- (18) 『全集』第十卷、三七―八頁。同様の記述は同巻一六一―七頁にも見られる。

(19) Phebe F. McKeen, "Upright against God" — A Sketch of the Early Life of Joseph Hardy Neesima, 1867. 『新島研究』三十六号（一九六九年九月）五六頁。

- (20) 『全集』第十卷、一六頁、三八頁。
 (21) 同右、一六頁。
 (22) 同右、二四頁、五〇―一頁。
 (23) 同右、四二頁。
 (24) 『全集』第五卷、四〇頁。
 (25) 同右、四一頁。
 (26) 同右、四三頁。

(27) 『全集』第十卷、四六頁。
 六月二十二日の日記に次のようなことが記されている。「甲比丹一切書を教へす。外に一人有りし故此者に教授を頼みしか、甲比丹

同様貪慾鄙劣の者なる故、七ツか八ツの語を聞〔き〕且一語三四度も教呉れし二、真似出来されば怒声を発し、或は鼻と頰に手を掛け口を開きて、doと云へと申せし事も有之候」（『全集』第五卷、三九頁）。

また「今は襦半三枚を洗ふ。我家に在し時自衣を洗らわす」「吾今言語通せざる故空ク支那人之指揮を受けり」「自從辞函楯／空被役洋人」（六月二十一日、日記——同巻、三八―九頁）といった記事も、新島における、傲慢という意味での武士的自己的挫折した姿を示すものといえよう。

(28) 『全集』第十卷、三八頁。なお、同上の一六一―七頁も参照。

(29) 日記は『全集』第五卷、書簡は第三卷を参照されたい。

(30) McKeen, 前掲書、五六頁。

根岸橋三郎は、新島が幼少のころ、祖父弁治が彼に「破天連由來之事」を語って聞かせたこと、また父民治が「ゼスイット」に因んで「是水」と号したこと等を伝え、いかにも当時の新島家がキリスト教と関係があったかのように語っている（『新島襄』大正十二年、警醒社書店、三一頁、一七一頁）。しかし、新島自身は一切そのようなことには触れていないので、ここではそれは採らない。

(31) 『全集』第十卷、二三四頁、四九頁―五〇頁。

(32) 『全集』第三卷、四一―五頁。

(33) そうした当時の日本国内の様子については、『全集』第十卷、二九―三〇頁を参照。

(34) 『全集』第十卷、三五頁。

(35) そのために、新島は出仕を放免されることを願って、わざわざ藩邸の持ち場を抜け出したり、脱藩を計画したりしている。（『全集』第十卷、一二頁、三三―四頁）。新島が当時、自由をどれほど欲し

ていたかは、手記の随所に見ることが出来る。

(36) 新島はそのとき、新藩主(板倉勝股)を次のように批判している。「殿様のたのしみは主として食うことと飲むことだった。彼は部下を昇進させたり罷免したりするのに、お気に入りの妾の意見をきくことがしばしばだった」(『全集』第十卷、三一―二頁)。

(37) 『全集』第十卷、三六―七頁。

(38) 一八七四年のアメリカン・ボード主事宛の手紙(同右、一八三頁)。

(39) McKeen, 前掲書、六〇頁

(40) 『全集』第十卷、二六―七頁。

(41) 新島は「天父」との出会いのときに、「孝行に対する孔子の教えが、いかに偏狭で偽りがあるかということにはじめて思い当った」(『全集』第十卷、三八頁)と述べているが、こうした批判もはつきり自覚されない仕方では、ずっと以前より感じられていたことと推測され得る。

(42) 「いつの時代、どの社会においても、青年期におけるアイデンティティーの確立は一種の危機的状況を伴う。」とくに「制度的なアイデンティティー確認の手続きが無いような場合、あるいはたとえあっても社会的に統一性をもっていないような場合、青年のアイデンティティー形式に伴う危機(identity crisis)はきわめて深刻になり、時には病的なまでに混乱することがある。」(松本滋『宗教心理学』東京大学出版会、一〇八―九頁)。

(43) 以上『全集』第十卷、一三頁。

(44) 松本、前掲書、一〇〇頁。

(45) 『全集』第十卷、三七―八頁。なお一五―六頁も参照。

(46) 新島における、神を座主とする新たなヒエラルキーの発見には、

神の別名が「天父」であったことが一助となったとも考えられる。

なぜなら、神が天の「父」である以上、神に対してこの世の父に対すると同様の内面的な関係が確保され得るからである。新島が、神すなわち「天父」であることが「私の内部に神に対するさらに大きな尊崇の念をかきたてて」と語っているのは、このためだろう。他方、その場合、「天」の父に強点を置いて考えることもできるかも知れない。なぜなら、新島は蘭学を勉強する以前、漢学を修めており、この関係で儒教思想にも精通していたと思われるが、「中国人の世界観の根本となっているのは、ほかならぬ天の思想である」(森三樹三郎『中国思想史』上巻、第三文明社、一九七八年、三〇頁)といわれるからである。しかし、この点については、なお詳しい考察が必要であろう。

(47) 『全集』第十卷、四一頁。なお、注(17)のニコライ宛書簡も参照。

なお以上の外、左記の書も参考にした。

森中章光編『新島先生詳年譜』同志社、一九五九年。